精神療法の技法論

成田善弘著

金剛出版，A5判280頁，4,200円，1999年1月刊

（名古屋大学医学部保健学科）鈴木國文

「精神療法の技法」「強迫・境界例・心身症」「書評」という三部からなる，著者のこれまでの論文，記事の一部をまとめた本である。

精神療法の技法について語る第一部は，患者，治療者それぞれの想いの動きを的確にとらえ，技法を語りながらその技法が当然前提とすべき基本的な姿勢をも伝える読みごたえのある論文からなっている。ここに挙げられた論文は，どれも読む人の姿が書き手によくイメージアップされた叙述からなり，伝えようとすることが明確に意識されたものばかりである。精神療法のようないささか曖昧さを残す技術こそ，こうした著者を得て初めて伝達可能となるものであろう。とくにリエイゾンについての一章は，著者の総合病院での経験を踏まえ，医療全体の中での精神医療とは何かという原理的な問いから出発した得難い考察である。患者にとっての「病気」，身体医学にとっての「病気」，そして精神医療にとっての「病気」，それぞれを問うことから始める考察の手法は，日々の臨床を決して小手先の技法でこなしてこなかった著者だけに可能なものであろう。精神療法の専門家がリエイゾンを語るとこれほどに含蓄のあるものになるのかと感心させられる。

総説的な論文を多く含む第二部では，強迫という，精神医療にとってきわめて困難な事態を中心に，強迫と境界例，あるいは強迫と抑うつとの関係が論じられ，さらに心身症の症例研究と斬新な考察が含まれている。強迫に関して十分な文献を伝える読みやすい参考図書がない現在の日本の状況では，このいくつかの章は貴重である。ここに挙げられた論文は，臨床経験に基づく考察を重視してきた著者が，その一方で多くの研究者から何をどのように学んできたかを伝え，文献と実践とをいかに結び付けるかという点でも興味深い。

第二部には，症例に基づく考察も多く挙げられているが，そうした考察では常に家族関係という問題が十分に射程に入れられている。少しだけ気づいたことを付言するならば，著者が父親の問題を扱う時にやや厳しく，母親の問題を扱う時にむしろ共感的であると感じたのは私だけだろうか。あるいはこれは，私という読者の問題かもしれぬ。

第三部にいくつかの書評が付されているのは舞台裏を少しだけ見せてもらっているようで興味深い。これも，経験に基づく考察に重きを置いてきた著者が，その経験を積み上げるためにどのように本と付き合ってきたかを伝える面白い企画である。

この本は，著者の意図がそこにあったか否かはともかく，総じて，精神療法家はどのように自身を鍛えるべきかがわかる本となっている。生物学的精神医学の外では，統計手法や治療者の資格問題ばかりが話題となる昨今の精神医学の中で，本当に精神療法ができる治療者を志す人が，いかに勉強し，研究すべきか，その指標を示す導きの一書となろう。

自閉症の発達精神病理と治療

小林隆児著

岩崎学術出版社，A5判192頁，3,500円，1999年1月刊

（実践女子大学）中根　晃

著者小林隆児氏が1985年に著した「自閉症児の精神発達と経過に関する臨床的研究」（日本精神神経学雑誌）は，筆者の知る限り，自閉症の多様な症状を思春期の発達課題の視点からとらえた世界最初の論文である。小林氏は九州大学精神科で行われている自閉症のグループ指導である土曜教室に学生の頃から参加し，毎年九重高原で実施される自閉症のための朝日キャンプでも直接，指導に携わっておられた。このような治療実践の成果として，自閉症の青年期・成人期における予後が従来考えられているよりずっと良好だとした研究報告は外国の専門誌にも投稿され，高い評価を受けている。本書の第1章「自閉症の青年期・成人期」は力動的視点による解析が主題となっている。このような意欲的な取り組みが本書の特徴である。著者が学生時代からボランティアとして自閉症の子どもたちと触れ合っていたことは，ど

の研究者よりも自閉症児者に接近した見方をすることを可能にしているのであろう。自閉症に対する独自な力動的見方は青年期ばかりではなく，最近では幼児期早期の治療論にも論究している。

つぎの「種々の精神疾患の合併が見られた発達精神病理」の章と「運動技能と社会的機能からみた発達精神病理」の章は，青年期になってしばしば見られる精神病像を力動的な自閉症理解で治療的に対応していったことが語られており，自閉症の精神病的状態を的確にとらえるさいに大いに参考となる部分である。

第4章「現象学的発達精神病理」は本書の圧巻であり，著者のオリジナルな概念である知覚変容現象を中心に思春期特有の自閉症の精神病理が記述されている。自閉症にはさまざまな感覚領域で知覚過敏が存在し，浮動的に出現することは広く知られている。著者はそれを知覚の変容として危機的状況下で体験されることを指摘し，そのバリエーションとして特定の文字の人格化や図柄の相貌化を取り上げる。一般に自閉症児者は文字を意味的よりも形態的に把握するし，他人の顔貌に淋しさとか，不機嫌さなどを読み取ることが苦手である。著者の症例では「九州」とか「電力」という文字が憧れの人になるなど人格化したり，人の顔の図柄が生き生きとした表情をもったり，特急富士の警笛が自分を励ましているように聞こえるなど，相貌的に知覚されている。著者はこれらの相貌的知覚を原初的知覚様態とし，他人との情緒的コミュニケーションを通して他人との情動の共有，体験と意味の共有から生き生きとした共同世界に踏み入れるという発達の筋道を指摘し，その病理である自閉症では児童期，青年期を経て成人していく途上の破綻で知覚変容現象から多彩な精神病像や知覚の特有な意味づけへと発展すると述べるとともに，症状論的に分裂病との近縁性が示唆されるとしている。この情動的コミュニケーションをいかに正規なものに育てていくかが著者が現在取り組んでいる幼児早期の自閉症治療の中心なのだが，この時期の治療はどの研究者にとっても困難なものなので，著者も今回はそこまでは踏み込んではいない。その意味で本書の続編は大いに期待され，そのさいには筆者も討論を挑みたいと思っている。

仕事としての心理療法

渡辺雄三編

人文書院，A5判288頁，3,800円，1999年1月刊

（東洋英和女学院大学）小坂和子

表題をみて，思わずうなる臨床家は相当多いのではなかろうか。序章において，渡辺氏は，サリヴァンの「精神科医でもっとも頼りになる態度の人間はどんな人間だと思う？　単純な話だ。『自分の日々の糧を自分で稼がなければならない』ことがわかっていて，そのために働いている人間だ」を転用しつつ，心理療法家のプロ性について刺激的に論じている。本編は，渡辺氏のもとに集う，12人の若手臨床家たちの「事例報告」の形式をとっているが，穏やかに読み進めることのできる類いの書物では，決してない。事例に沿って，治療者のほうが直面せざるを得なくなってくる内的課題が開示されていく。そこには，クライエントから「破壊」を受け，迷いつつ，あきらめず，生き残っていこうとする治療者の姿が転移・逆転移という用語に呑み込まれることなく，生々しく記述されているのである。

「抱きしめてほしい……そうじゃないときっと私は死ぬわ」という女性患者と，女性治療者のみた夢（三宅論文）。転移性恋愛と，男性治療者側の性的空想（岡田論文）。「心理療法は安らぎのためにやるんでしょうか。私は一刻も早く治りたいからお願いしたんだが」と治療への疑問を問いかける50代の男性と，嫌気と怒りを感じつつ，父親に対する感情を思い起こす治療者（山田論文）。母親からの終結の要望と，〈ここに来るのやめるって言ってたけど〉「ウーワンワン，オエーオエー，これが返事」という子どもとのやりとりに困惑する治療者（浅井論文）。「全部わかってほしい」「すぐに何とかして欲しい」との訴えから中断を経て再来する患者と，「自分は心理療法家としてこの人の役にたてるのだろうか」との不安の正体を吟味する治療者（高橋論文）。さらに，後半の五論文では重篤な精神病者への心理療法によって，混沌とした世界をそのままぶつける患者と，それにゆさぶられる治療者の姿が報告される。「『人としての